

コミュニケーションを図ろうとする 態度の育成を目指して

駒澤 誠二



◆生徒に身につけさせたい力

コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの授業を通して生徒に身につけてもらいたい資質として、学習指導要領では「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を挙げている。生徒が外国語、特に英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うにはどのような指導が必要なのだろうか。勤務校で採用している *Genius English Communication* の教科書の特徴を生かした指導例を紹介したい。

① 音読活動で伝えたい内容を蓄積する (*Genius I*)

英語でコミュニケーションを図ろうとしても、伝えたい内容がなければ、コミュニケーションは成り立たない。そこで伝えたい内容を蓄積していくことが必要になってくる。まずは、教科書の内容を自分のものにしていくことから始めたい。そのための活動としては音読が有効である。

音読活動ではシャドーイングに代表されるような音のプロソディーの習得を目指した活動も大切だが、意味を考えながらの音読活動も忘れてはならない。音読に熱心に取り組んでいる生徒の中には、声を出すことだけが目標になっていて、内容を意識せずに活動している生徒も多い。そのような姿勢では音読活動を Output につなげることはできない。Read & Look up をさせたり、本文の一部を隠したり空欄にしたりするなどして、生徒が音読をしながらも英文の内容に意識がいく工夫

をしていく必要がある。

また、音読活動が Output につながる活動であることを考えると、本文の中の必要な部分だけを音読すればよいケースもあり得る。すなわち、Output 活動に結びつけたい内容や表現が含まれていない部分は音読活動を飛ばすのも1つの手である。さらに、英文が難しく、生徒にとって内容を考えながら音読をするのが困難なレッスンは、本文を易しい英語で Rewrite したものを音読させることも必要だ。音読活動をして、英語で伝えたい内容のストックを増やすということにつながらなければ意味がない。

また、音読活動の出口を指し示すことも重要だ。音読活動の後に Retelling や Summary Writing の活動をするをあらかじめ伝えておくことで、生徒が何のために音読活動をしているのかが明確になるだろう。

Genius I の教科書は内容的に優れており、英文の Retelling や Summary Writing などを通して英語で伝えたい内容のストックを増やしておきたい。Lesson 3 の “More Than Just a Piece of Cloth” や Lesson 8 の “Water Crisis” では、私たちが見過ごしがちな日本文化の背後にある日本人の心や日本の食料自給率、仮想水の輸入の現状を知ることができ、外国人に日本のことを伝える際に役立つ内容である。また、Lesson 4 の “Borneo’s Moment of Truth” や Lesson 9 の “Coffee and Fair Trade” は、「森林の伐採はよくない」とか「フェアトレードの製品を積極的に買いましょう」といった意見に陥りがちなテーマ

だが、森林伐採をせざるを得ない状況や生産者側の方にも努力が必要だといった視点も与えられており、環境問題や貿易問題に話題が及んだ時にも活用できる内容であろう。

教科書の内容と全く同じ内容を伝える場面がどれだけ訪れるかわからないが、英語で伝えたい内容を1つでも多く蓄えておくことは決して無駄ではない。自信を持って話せる内容が多ければ多いほど、積極的にコミュニケーションできる場面は増えるはずである。

② 教科書の表現を活用して使える表現を増やす (Genius I & Genius II)

実際のコミュニケーションでは、自分の経験や意見をその場で英語にし、伝えていかなければならない場面が多々ある。そのような場面に遭遇した時でも、積極的にコミュニケーションを図ろうとするためには、瞬時に使える英語表現を十分に身につけておくことが必要だ。そのための活動としては、クイック・レスポンスが有効である。

この活動を実施する際には、英単語1語で覚えさせたほうがよいものと、チャンク（意味のまとまり）で覚えさせた方がよいものとをしっかりと区別して生徒に提示しなければならない。

Lesson 1 “A Village of One Hundred” に出てくる “gap” という単語を例に挙げたい。新出単語であるこの単語を1語で覚えさせても、いざという時には使えない。この単語を1語で使う場面はあまりないからだ。教科書の本文では、“close the gap between the rich and the poor” と出てくるので、このまとまりで覚えさせたい。なぜなら、例えば「差を埋める」ということを英語で伝えたい時に、「埋める」は何かな、“bury” かな、と迷っているようではコミュニケーションできない。2秒以内に頭に浮かんでこない表現は実際の場面では使えないと言われている。実際のコミュニケーションの場面を想定し、役に立つフレーズで生徒には覚えさせたい。

Genius I の教科書では Lesson 1 から “it’s worth the effort” や “broaden one’s horizons” など、役に立つ表現が数多く登場する。また、語彙は文脈の中で増やしていかなければ、結局どの場面で使えるのかわからず、場合によっては状況に合わない不適切な表現を用いることにもなりかねない。教科書に出てくる表現を軽視せず、十分に活用することを薦めたい。

③ Research & Opinion Writing で伝えたい内容を蓄積する (Genius II)

コミュニケーション英語IIの授業では、自分で調べたこと、自分の考えや経験などを発表させる活動を通して、伝えたい内容の蓄積を図りたい。

Genius II の教科書から具体的な例をいくつか紹介したい。Lesson 6 の “Machu Picchu: City in the Clouds” の Part 4 では、マチュピチュが世界遺産に登録されたことで生じた問題点を取り上げられている。日本にも数々の世界遺産があり、その素晴らしさを紹介するのはもちろん大切だが、世界遺産に登録されたことでもたらされた負の部分はないかを調査し、発表させることも面白いだろう。

自分の考えを発表させる活動では、Lesson 4 の “Ahmed’s Gift of Life” や Lesson 10 の “Donald Woods: Real Journalism Takes Courage” で Ahmed の父親や Donald Woods のとった行動を Retelling させ、その後でそれぞれの行動に対する自分の意見を述べさせたい。自分の意見を述べるにあたっては、パレスチナ問題やアパルトヘイトなどの背景知識が必要となる。世界史の学習内容とうまくリンクさせれば、教科横断的な取り組みへと発展させることができるだろう。

Lesson 8 の “Emotions Gone Wild” や Lesson 9 の “Michael J. Sandel on Kant: Freedom and Morality” も内容的に大変興味深い。これらのレッスンでも、本文の内容を Retelling した後でそれぞれの考え方に対する自分の意見を発表

させたい。

実際のコミュニケーションの場面を想定した場合、ただ自分の意見を述べるだけでは説得力が弱い。自分の意見の根拠となった背景を述べることは大変有効である。そういう意味でも、自分の意見を発表する前に、本文の内容の Retelling は是非とも取り入れたい。

④ 正確さと流暢さを高める (Genius III)

コミュニケーション英語 I や II を通して、かなりの表現力が身につけているはずである。コミュニケーション英語 III では、その表現力に磨きをかけること、特に Accuracy と Fluency を高めることを重視して指導したい。勤務校の生徒のほとんどが大学受験をすることを考えると、身につけた表現力を受験でも使える力につなげていくことは必要である。受験で求められる「辞書を使わずに、限られた時間内で、英語で表現する力」を育む活動を是非とも取り入れたい。

◆「英語で授業」：想像力を生かした本文理解

「英語で授業」をすると、生徒が本当に本文を理解しているのだろうかと不安になることがある。そのため、本文を読む前に挿絵や写真などを利用してスキーマを活性化させたり、本文を易しい英語で言い換えたり、データや実物、写真や映像などを見せ、具体的なイメージを掴ませたりすることも多いかと思われるが、それとともに是非とも活用したいのが生徒の想像力である。

「英語で授業」をする際、教師ばかりが英語を話していたのでは、生徒のコミュニケーション能力は身につかない。授業の中に Interaction の場面を多く取り入れ、生徒に英語を使う機会を提供しなければ意味がない。生徒との Interaction があれば、生徒が教師の英語を理解しているのか、生徒が教科書の英文をどう捉えているのかを確認でき、また、生徒にとっては、授業に参加しているという充実感を抱くことができる。

ただ Interaction が大事だからといって、答え

が本文に明確に書かれている発問ばかりでは活発な意見交流は期待できない。本文から得た情報を基に、生徒が想像力を働かせなければ答えられない発問も是非とも組み入れたい。想像力を働かせて得た答えは生徒によって異なることが多いため、生徒同士でコミュニケーションをする必然性も生まれてくる。また、時には生徒から予想もしない答えが返ってきて、授業の場が和むこともある。生徒が本文から想像して抱いたイメージを出発点とし、そこから筆者が伝えたいメッセージを皆で考えていく、その過程を踏むことで、本文を深く理解することができるのではないだろうか。

ここで、想像力を働かせなければならない発問例を *Genius I* の中から簡単に紹介したい。

① 単語の持つイメージを想像させる発問例

• Lesson 4 “cutting down trees sustainably.”

→ Imagine that you are a woodcutter. Out of 1000 trees, how many trees would you cut down sustainably?

② 登場人物の気持ちを想像させる発問例

• Lesson 7 “made her give up the medal.”

→ How do you think Rusty felt at that moment?

③ 英文が表す内容を想像させる発問例

• Lesson 5 “When life gives you lemons, make lemonade!”

→ What does it mean?

• Lesson 9 “Shopping is politics.”

→ Why is shopping politics?

◆おわりに

Genius I, II, III の特徴と「想像力」を生かした授業の実践が、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする人材の育成につながるよう、さらなる研鑽を深めていければと思っている。

(こまざわ せいじ・岐阜県立斐太高等学校教諭)